

中国文法学界の悲願が成就

杉村博文

昨年十一月、今後の現代中国語文法研究にまちがいく深遠な影響を与えるであろう大著が出版された。上海師範大学張斌教授主編の『現代漢語描写語法』（現代中国語記述文法）である。現代中国語という巨大なソフトウェアの、現時点における最新、最大の解説書である。本文だけで一一三頁（三四行×三九字）に達する。

この大著の出版と相前後して何篇かの紹介文が書かれているが、そのうちの一篇に張汝清「百年夙願、十年一剣」がある（『読書』社会科学版、二〇一〇年十一月二五日）。この文章は『現代漢語描写語法』自体を紹介するものではなく、新中国成立以来の中国語文法学史における『現代漢語描写語法』の位置づけという角度から書かれている。作者はまず、

一言語が包括的、詳細、科学的な記述文法をもつかもたないは、その言語の文法研究の水準を測る重要な指標である。

と述べた上で、

二〇世紀五〇年代から、呂叔湘、丁声樹等先輩言語学者は前ソ連のアカデミー文法に触発されて、現代中国語記述文法を編集したいと願い、綱領的な『現代漢語語法講話』（一九六二）を刊行したが、当時はまだ基礎研究が弱く、人材も不十分であつたため、体系的な中国語記述文法を書く条件が熟していなかった。

と紹介し、さらに八〇年代、九〇年代の状況に触れたのち、次のように続ける。今世紀に入り、先輩文法学者の多くが遺憾を胸に世を去っていくなか、張斌

張斌主編
現代漢語描写語法



商務印書館
2010年 [11907円]

先生は歴代の先輩学者の大望を完成すべく、八〇歳を超える高齢で現代中国語記述文法の編集を決意した。それは中国語文法研究のほぼ一世紀にわたる開拓と発展に身を投じ、それを見守ってきた、中国語文法学者としての張斌先生の長年の夢でもあった。

読む者に深い感動を覚えさせる一段である。文章は続いて張斌教授の多年にわたる業績に筆を転じ、最後に、

十余年の時を経て『現代漢語描写語法』が刊行された。本書の刊行は歴代中国語文法学者の夙願を実現したものであり、中国語文法研究史において里程碑的意義を有する。

と結ばれている。「夙願」ということは

遣いが、ぐっと来る重みを感じさせる。
『現代漢語描写語法』の目次は以下の
ようである。

第一章	語素
第二章	構詞法与造詞法
第三章	実詞
第四章	虚詞与特殊詞
第五章	短語
第六章	句子分析
第七章	句型
第八章	句類
第九章	句式
第十章	複句
第十一章	空間範疇
第十二章	時間範疇
第十三章	指称範疇
第十四章	数量範疇
第十五章	語気範疇
第十六章	重疊
第十七章	語序
第十八章	句子的語義分析
第十九章	組合与銜接
第二十章	語法現象の解釈

附録

一	標点符号
二	詞的結構分類表
三	動詞与時態助詞搭配表
四	主要能願動詞用法表
五	形容詞生動形式表
六	動量搭配表
七	名量搭配表
八	現代漢語非量名詞表
九	区別詞表
十	和区別詞相關的同音同形詞表
十一	常用介詞表
十二	常用連詞表
十三	語気詞功能表
十四	狀語与補語比較簡表
索引	

この目次から、われわれは『現代漢語描写語法』の編者が従来の文法体系からの脱皮をめざしたことを窺い知ることができよう。

主編者の張斌氏は序文の中で『現代漢語描写語法』を「中国語文法を学ぶ教科書ではなく、中国語文法を研究討論するための参考書」であると規定し、「記述」

の意味を、

一般的な理解では、記述文法とは共時的なものであり、通時的なものではない。体系的なものであり、モノグラフ的なものではない。記録的なものであり、解釈的なものではない。われわれもこの枠組みの中で記述を行った。と紹介している。

『現代漢語描写語法』が全体的にはこのような性格づけと枠組みの下で執筆されているのは言うまでもない。しかしこの枠組みを逸脱して、解釈の領域にまで踏み込んだ記述も時おり見られる。一例を挙げると、「得」補語の「得」の意味機能に関する記述である。

意味的に見ると、「得」には「已然義」がそなわっている。その理由は、①「得」の原義は「獲得する」である。述補構造における「得」はすでに動詞から助詞へと虚化を遂げてはいるが、「すでに占有した」という原義が、状況に応じて程度の差はあるものの、なお痕跡を残している。よって、「得」は意味の深層において「已然義」をも

つはずである。②実例から見ると、「得」補語文によつて表されるのはすべて動作行為の已然状態である。たとえ一部の「得」補語文において、表面上、已然状態を表しているように見えなくても、それらは經常性にもとづく已然であつたり、仮想された已然であつたりするだけで、やはり已然を表している。(五六二頁)

この記述を読んで、筆者(杉村)は次のように思った。

その当否はともかく、理由①に論理的な破綻はない。しかし理由②は、構文レベルの意味特徴を構文の代表字である「得」の意味機能に直接リンクさせており、論理上の飛躍がある。

次の例に見られるように、「得」補語構文は前方照応的に使われることが多い。

五星红旗周围有一圈金属的栅栏, 栅栏里还站着四个解放军战士。他们都站得笔直笔直的, 而且还端着枪。

「站着」と「站得」の関係が「四个解放军战士」と「他们」の関係に平行することを確認してほしい。ここから、「得」

を前方照応形式を構成する形式語であると分析する可能性が考えられる。また、そう考えれば、「得」が先行形式にとられないことも説明がつく。次の例では「拉得」が「拉了」を受けている。

你哥哥拉了贝多芬的奏鸣曲, 他拉得真好!

前例と同じく、「拉了」と「拉得」、「你哥哥」と「他」の平行関係に注目されたい。

こういう著者対読者の対話も可能になるため、個人的には『現代漢語描写語法』の記述が張斌氏の定めた枠組みを逸脱することは大歓迎なのであるが、ここはさまたぎな意見が許されるところであろう。逸脱の理由を考えると、三十二名という執筆者の多さと(二十三大学に分属する)、「研究討議するための参考書」という編集方針が挙げられる。そしてこの二点は、またほぼ必然的に記述の不統一という結果を生むことになる。不統一の具体的な現われは次の二点である。

①例文の可否の判定に揺れが生じる。たとえば、

他把李琳气得哭了。(五五三頁)

この例は「不自然」だと判定するネイティブが多い。

你教现代汉语的是不是中文系九九级的。(三五四頁)

学生们游泳的是体育馆的室内游泳池, 不是露天的游泳池。(三三三頁)

この二例は「不成立」だと判定するネイティブが多い。

他扔我一个足球。

この例は、第五章第五節の記述に従えば文法に合致し、第九章第十節の記述に従えば文法に違反している。

他黄头发(二七〇頁)

この例は「文」レベルでしか存在しないと判定するネイティブが多いが、第五章第一節では「句」レベルの例として挙がっている。

「扔」の構文機能に関する記述の不一致などは、おそらく異なる執筆担当者の言語形成環境と関係してこよう。実際、筆者の回りにも「扔我一个足球」を許容するネイティブと許容しないネイティブがいる。その形成過程から見て、「普通話」の包含する文法現象に純度の高さはもと

より望めない。それだけに、非典型的な文法現象の記述に当たっては、記述対象の使用環境と記述者の言語形成環境に関する詳細な情報が求められる。

②同一現象の分析に異説がある場合、その取捨に不統一が生じる。

これに関しては挙げはじめるときりがなくなるので、一例だけ挙げよう、

你逼得他没有一点儿路可走了。

第七章第三節「述補謂語句」では、この文の「得」以下のすべてを補語とするのであるが（四三五頁）、第九章第三節「『得』字句」では、「没有一点儿路可走了」のみを補語とし、「他」は「逼得」の目的語であるとする（五六三頁）。推測されるように、第七章と第九章の執筆者は別人である。

このような記述の不統一も「研究討議に供する」という視点からすれば、もちろん決して非難されるべき欠点ではなく、大いに推奨すべき寛容性であるといふべきかも知れない。

史金生氏の「現代漢語描写語法」

——百年漢語語法成果の全面総結——（中

国社会科学報」二〇一〇年一月九日）も、『現代漢語描写語法』の出版に合わせて書かれた紹介文である。この文章は気鋭の文法学者による正面切った内容紹介で、字数も他の紹介文より多い。史氏の書評のキーセンテンスを挙げるとすれば、次の一文になる。

本書は造語法から構文法へ、文法構造から文法範疇へ、分析から総合へ、記述から解釈へという、中国語の特徴に合致した精緻な文法学の体系を構築した。

中国語記述文法における記述とは一体なにか、どのように記述するか、この問題に対して新しいスタイルを打ち出すことに成功したという評価である。個人的には記述の内容に「解釈」が取り込まれている点に注目しておきたい。『現代漢語描写語法』は結びの第二十章に左記のような構成で「語法現象的解釈」を置き、中国語記述文法における「解釈」の位置づけを行っている。

第一節 描写与解釈

一 描写語法和解釈語法

二 解釈の対象与角度

第二節 句法現象的語義解釈

一 詞義与句法現象的解釈

二 語法化与句法現象的解釈

第三節 句法現象的認知解釈

一 認知語法及其基本觀點

二 漢語語序的認知解釈

三 有界与無界

四 空間方位的認知解釈

第四節 句法現象的韻律解釈

一 漢語的韻律

二 韻律与句法

三 句法結構的合法性的韻律解釈

史氏の書評は以下のように結ばれる。

総じて、『現代漢語描写語法』は構造主義言語学を基礎として、生成変形文法、格文法、結合価文法、認知文法、機能文法、ディスコース分析、「三個平面」等の文法理論にもとづく研究成果から十分に成熟したものを適宜吸収しつつ、過去百年に及ぶ中国語文法研究が勝ち取った豊かな成果を十分に反映している。歴史的蓄積と時代精神を體現した、体系的、包括的、精緻、科

学的な中国語文法書である。本書の出版は、中国語文法研究におけるマイルストーンであると言える。

複数の方法論によって得られた、長年の研究成果を取り込んで記述が行われたということであるが、自然言語というものが多様な側面を有し、かつその多様性の性質がさまざまに異なっているとすれば、それらを分析解釈する方法論も複数のものが必要になって不思議ではない。

編集の実務を統括したのは上海師範大学の斉滙揚氏である。斉氏は編集後記の中で次のように書いている。

われわれはついに歴史と時代がわれわれに課した責任を果たした。われわれはついに学界の先輩から託され受け継いだ任務を完成した。決して十分に満足のいくものではない。しかしわれわれは最善を尽くしたと言って恥じるところはない。

……………

第一版刊行の日は、即ち第二版に向けての修訂作業開始の日である。『現代漢語描写語法』は長期にわたるプロ

ジェクトである。われわれは第一歩を踏みだした以上、第二步、第三步をしかりと歩まなければならない。われわれは避けて通る選択肢をもたない、われわれは進んで重責を担う。

まさに擲地有声と謂う可き言である。

『現代漢語描写語法』の刊行に合わせ、
「慶祝張斌先生九十華誕、從教六十年學術研討會暨《現代漢語描写語法》首發儀式」が二〇一〇年一月二七日、二八日の両日、上海師範大学で開催されたのだが、開会式において、商務印書館と上海師範大学が立ち上げ資金を提供し、上海師範大学に「現代漢語描写語法研究室」を設けることが発表された。

「現代漢語描写語法研究室」の設立は今後の中国語文法研究にとってきわめて大きな意味をもつ。文法研究における知見の集積、評価、継承という作業は、言語研究の他の領域に比べて遅れており、それが組織的に行われることはかつてなかった。「現代漢語描写語法研究室」の設立はその空白を埋める行動なのである。第一版の参考文献には、日本人研究

者の業績が二〇〇二年くらいを下限として、十三点挙がっている。『現代漢語描写語法』の中に日本人研究者の仕事が生きているのである。第二版でそれが二倍三倍となればうれしい。

言うまでもないが、われわれ日本語話者は中国語に接するたびに中国語話者には見えないものを見ている。今、『現代漢語描写語法』の中にあるのは中国語話者の目に映る中国語の姿でしかない。どのページを開いても確かに多くの知識を得ることができる。しかし、読んで今ひとつ興奮を覚えることが少ないのは、われわれ日本語話者の疑問に対応する記述が少ないうからである。もちろん、これは「現代漢語描写語法研究室」の仕事である以上に、われわれ日本人研究者の仕事である。その仕事を通して、中国語話者の目に映る中国語の姿をより鮮明なものにすることができたとき、『現代漢語描写語法』の参考文献に上がる研究となる。『現代漢語描写語法』は、一緒に仕事をしようといわれわれを誘っている。

(すぎむら・ひろふみ 大阪大学)